

生涯、主を呼ぼう

マタイ二・三八〜四二

竹下節子さんと言う宗教学者がフランスの教会学校での話をしていました。司祭さんが子どもたちに言います。あなたが大好きな五人の人を思い浮べ、手の指に書いて「ごらん」。それを書くと共に、手の平を広げて、真ん中にイエスさまのお顔を書いて「ごらん」。出来上がった手を高くあげた子どもたちに「あなたがその五人の人たちと巡り合ったのは、イエスさまが真ん中でつないでくださったからです」。この地上で私たちが愛し、私たちのことを愛してくれる人たちと出会うのは、イエスさまが「つないでいてくれるから」。自分の力だけでは生きるのがつらくなるときがある。そんなときイエスさまを思いたす。苦しみと嘆きを前にして、主の御名をわたしは呼ぶ」詩編 一一六篇)。そして気づく。深いところ

でイエスさまが支えていてくれると。もう一度、人々と共に歩んでいこう。心にきめる。

今日のマタイ福音書には「ゆるしを見せよ」と迫る偉い人々がでてきます。イエスさまと出会った人たちがなぜ喜ぶのか理解できないからです。しるしの代わりにイエスが例にたすのは、反抗から「転主」に向き直った「ネベ」の人々や、ソロモンに宿った主の知恵を聞くため贈り物を携えてやってきた南の国の女王。どちらも主がつないでくれた人々です。

讚美歌二二を歌い始めた醍醐教会ですが、備付歌集が買えず困っていた。信徒の友の教会紹介欄に「一言それを書いたら、全国の信徒たちが祈ってくれた。歌集を贈ってくれる人もいた。

主を呼ぼう」と志す群れを、主は決して見逃さず、速やかに溢れる恵みで満たしてください。それを目の当たりにした私たちは、もう孤独ではありません。主がつないでいてくださいます。